

海外の話題

台風の風が吹いている香港フード・エキスポは、女子団体を手ぶらで帰す訳にはいかない

農林中央金庫 香港駐在員事務所長 田辺 徹也

台風が急接近する中、フード・エキスポ開幕。農林中金も初出展

山が迫っているため滑走路直前での急旋回が必要で、かつ隣接するビル群の軒先をかすめるように降下しなくてはならず、「世界一着陸の難しい空港」として知られた香港の旧国際空港。その空港と同じ名がつけられた台風「啓徳（カイク）」が急接近する8月16日、今年の香港フード・エキスポが始まった。

今年の夏、世界で最も注目を集めたイベントは、間違いなくロンドン・オリンピックであると思うが、オリンピックが4年に1度のスポーツの祭典なら、アジア最大級の食品展示商談会として知られるフード・エキスポは、年に1度の「食のアジア大会」とも言える。オリンピックは当商談会の3日前に閉幕したばかりで、当時TVからは、いきものがかりの「風が吹いている」が連日流れていたのだが、一方、香港の街中では、近づく台風の影響で刻々と「風が吹き荒れている」状態になりつつあった。

もし「シグナル8」と呼ばれる高レベルの台風警報が発令されると、公共交通機関の運行が止まり、当商談会も当該警報が解除されるまで中断されるため、関係者は大いに気を揉んでいたのだが、実は筆者も台風の行方に気が気ではない一人であった。何故なら今回のフード・エキスポには、会員・農業者の輸出サポート強化の一環として、我々農林中央金庫もセラー6団体と共に初めて出展したからである。

我々は「トレードホール」の伝説となれたか？

23回目を迎えた当イベントは、世界26カ国から過去最多となる1,100以上の出展者参加となった。特に今回からは、特定国にスポットをあてたプロモーションを行うべく、パートナーシップカントリー制なるものが導入されたのだが、初代パートナー国には日本が選ばれ、日本勢は昨年の168を大幅に上回る225団体・企業の大規模出展となった。会場となる香港コンベンション&エキシビジョンセンターの広大な展示スペースは、プロのバイヤーなど業界関係者のみ入場が許される「トレードホール」と一般来場者を対象とした「パブリックホール」の2つのエリアに分かれており、パートナー国の日本にはトレードホールでも例年にも増した、より広い面積が割り当てられた。

ご案内のとおり、昨年、震災後の風評被害で当地の日本産食材や日本食への需要が一時著しく低下したこともあり、初出展に当たっては正直一抹の不安が無かった訳ではないが、今回の日本エリアの盛況ぶりを見る限り、少なくとも「人気・関心の高さ」という点においては、震災前に優るとも劣らない水準に回復しているように筆者には感じられた（ただし、人気があることと実際に売れることとは別であり、特に急速に品質を上げつつも価格面で優位にある台湾産・韓国産との競争は今後益々激しくなるものと認識している）。実際、今回我が国がパートナー国となっていることから、来場者のうち、かなりの人たちは日本勢の展示が目当てであったと想像されるが、最終的に今年来場したバイヤーは、昨年度を30%上回る16,000人超に上った。

特に我々のブースは、もともと6つのセラーの所在地・出展物がバラエティに富み、とりわけ各出展物にバイヤー訴求力があるうえ、幸運にもトレードホールでも絶好のロケーションに陣取ることができたため、鬼に金棒、ウサイン・ボルトが第4コースを走るようなもので、詰め掛けた多数のバイヤーから得た感触も上々であった。ただし、初出展ということもあり、展示方法やプレゼンの仕方、各ブースを貫く一体感の創出等、今後の改善の余地が大きいことも確かで、ボルトのように伝説となるには、まだまだ努力が必要だ。

30万人超の一般入場者は、手ぶらで帰る訳にはいかない

香港フード・エキスポの特徴のひとつは、上述のとおり、トレードホールに加え、パブリックホールが設けられることである。当会場では、毎週のように何らかの展示会・商談会が開催されているが、大半がプロ向けで、一般市民を対象としたものは意外と少ない。特に当イベントは、入場は有料であるものの、普段なかなか口にする機会のないものの試食や特別価格での人気商品購入ができたり、子供の入場も許されたりと、香港市民にとっては夏の人気イベントとして定着しており、一般入場者数は例年なんと30万人を超える。

特に5日間の全会期の中日で、トレードホール出展最終日となる18日の土曜日には、トレードホールも一般に開放されるため、人出は最高潮となった（残る19日、20日はパブリックホールのみ開設）。水泳男子メドレーレーの選手たちは「康介さんを手ぶらで帰す訳にはいかない」と奮起したそうだが、主にプロ向けに出展している我々も、この1日を楽しみに来場する香港市民を手ぶらで帰す訳にはいかないと、試食に、説明に、個人メドレー状態だ。

手ぶらどころか、特に女性はかなりの割合で、購入商品や試供品を持ち帰るためのショッピング・カートを持参しており、恒例イベントとして手慣れたリピーターが多く存在することを物語っていた。また、こうしたマイ・カートとは別に、パブリックホールでは各出展者が自らの商品を詰めかつ商品名を大きく記載した販促用のショッピング・カートも売っていて、これも大人気。社会勉強ならびに「自分へのメダル」のつもりで、筆者も買ったが、記念の品だと思ってもったいなくて未だ使っていない。

女子団体のTクイックが、やがて日本産を支える

こうしたカートを引いた常連と思しき女性たちは、いろいろな面で勝手がわかっているようで、だいたい仲間連れで来ており、誰かが魅力的なブースを発見すると、蜜蜂がダンスで花の場所を伝えるが如く、携帯電話で連絡を取り合い、あっという間に試食に列ができる。オリンピックでは日本女子団体の活躍が目立ったが、女子バレーがAクイックなら、当地の女子団体はTクイックである（TはもちろんTasting(テイステイング)）。斯く言う筆者も、食に対する関心は人後に落ちず、こういった試食等にも大いに情熱を燃やす方なのだが、彼女たちの前では予選敗退だ。

人口わずか700万人の香港が我が国最大の農水産物輸出先となっているのは、一部の富裕層のみならず、こうした人々の情熱から生まれる需要があるからだ、改めて感じさせられたが（庶民に見えて実は富裕層だったりするのも香港の懐の深いところだが）、香港の一般市民にとって日本産のものは高嶺の花であることも多く、こうした展示会での試食人気は必ずしも現実の需要に結びつくとは限らない。しかしながら、旨いものを食べたことのない人に旨いものの魅力を伝えることは困難であり、女子バレーのメダルは28年ぶりだったそうだが、あたかも選手を育てるが如き長いスパンで、こうした地道な試みを続けていくことが重要なのだ。そして我々の役割は、そうした試みの場を、今後とも地道に提供していくことだと再認識した。たとえ台風が来ようが…。

台風「啓徳」の行方

さて、その「世界一着陸の難しい空港」と同じ難儀な名前がついた台風「啓徳」の行方だが、結局、会期初日の夜半に香港に最接近し、午後10時過ぎにシグナル8警報が発令されてしまった。しかし、かつての香港到着便の如く手前で急旋回して直撃は免れたため、早朝には警報が解除され、5日間のフード・エキスポは一切中断・短縮されることなく、一般来場者は39万人と昨年を上回って無事会期を終えた。やはり「啓徳」は台風となっても着陸が難しいようだ。